

シュプランガーと全国学校会議

西村正登

E.Spranger und Reichsschulkonferenz

NISHIMURA Masato

(Received September 27, 2013)

1. 問題の所在

シュプランガー (Eduard Spranger, 1882-1963) の『教員養成論』(Gedanken über Lehrerbildung, 1920) は、1920年1月に公刊された後、その後のドイツ教員養成に賛否両論を含む様々な波紋を投げかけた。

本稿では、1920年6月に開催された全国学校会議の展開を辿りながら、次の3点を明らかにしていきたい。

- ① 全国学校会議は、どのような経緯で展開されていったか。
- ② 全国学校会議でシュプランガーは何を主張し、会議の結果はどうか。
- ③ シュプランガーとベッカー (Carl Heinrich Becker, 1776-1833) との関係はどのように進展し、プロイセンの教育アカデミー設立には主に誰の意見が反映されていたか。

ドイツの国民学校教員養成に関する多くの文献の中では、シュプランガーをプロイセンに設立された教育アカデミー (Pädagogische Akademie) の精神的な父 (der geistige Vater) として、ベッカーをそれを政策的に実現した人物として位置づけ、両者は協力しながらそれを実現し、戦後設立された教育大学 (Pädagogische Hochschule) の先駆者と見なすことが一般的な通説となってきた⁽¹⁾。そこで、上記の3点を明らかにすることにより、従来一般に考えられてきたこの通説が正しかったかどうかを検証していくことが、本稿の目的である。

シュプランガー自身、自らを教育アカデミーや教育大学の精神的な創始者であることを自認していた。例えば、彼は1919年12月22日付のハートリヒ (Käthe Hadlich, 1872-1960) への手紙の中で『教員養成論』がドイツの教員養成のために寄付 (Stiftung) されたものであると述べている⁽²⁾。また、彼は1932年2月23日付のビュッヒャー (F. Bücher) への手紙の中で、教育アカデミーが彼の『教員養成論』に起源をもつものであると述べている⁽³⁾。さらに、彼は1961年1月29日付のアルトハウス (P. Althaus) への手紙で、自らを戦後設立された「教育大学の計画の創始者」⁽⁴⁾と呼んでいる。

しかし、他の文献の中では、必ずしもシュプランガーは、ドイツの国民学校教員養成の創始者として位置づけられていない。例えば、ドウリーシュ (J. von den Driesch) によって書かれた「プロイセン文部省の公的な覚え書」(Offizielle Denkschrift des preußischen Ministerium) とベッカーの論文「ドイツ国民教育制度の再建における教育アカデミー」(Die Pädagogische Akademie im Aufbau unseres nationalen Bildungswesens, 1926) の中には、シュプランガーと教育アカデミーとの関連については一言も述べられていない⁽⁵⁾。それは、シュプランガーとベッカーとの間に、教育アカデミーに対する基本的な構想の相違が存在していた

ためであろう⁽⁶⁾。また、当時ワイマール共和国の教員養成の指導的な人物の1人であったリーケル (A. Riekel) は、「大学の教員養成」(Die Akademische Lehrerbildung, 1931)の中で、教育アカデミーの「精神的な父」にふさわしいのはベッカーであり、けっしてシュプランガーの構想を実現したものではないと述べている⁽⁷⁾。さらに、シュプランガーの親しい友人であり、雑誌『教育』(Die Erziehung)を共に編集して精神科学的教育学派の中心的人物の1人となったフリットナー (Wilhelm Flitner, 1889-1990)も、彼の論文「教育アカデミーにおける教育学研究」(Das Pädagogikstudium an der Pädagogischen Akademie, 1929)の中でシュプランガーの名前を挙げていない⁽⁸⁾し、「教育アカデミーの発展」(Die Entwicklung der Pädagogischen Akademien, 1933)の中でも、シュプランガーの構想と実際に設立された教育アカデミーとの根本的な相違について説明している⁽⁹⁾。同様に、ヴェーニガー (Erich Weniger, 1894-1960)⁽¹⁰⁾とハーゼ (Otto Haase)⁽¹¹⁾も、教育アカデミーをベッカーの設立によるものと述べ、シュプランガーの名前を挙げていない。

これらの文献から推測すると、シュプランガーは、1926年に設立されたプロイセンの教育アカデミーに直接関与していなかったのではないとも考えられる。したがって、シュプランガーを教育アカデミーの精神的な父として、ベッカーをそれを政策的に実現した人物として位置づけ、両者が協力してそれを実現し、戦後設立された教育大学の先駆者である、という従来の通説は再度検証してみる必要性が生じてくる。

歴史的に見ると、ドイツで最初に設立された「学校教員のアカデミー (Schullehrerakademie)」は、1740年から1744年にかけてマインツに存在した⁽¹²⁾。次に、1874年以後、さまざまな形態をもった教育アカデミーや教育大学についての提案が行われた。例えば、それらは、いろいろな教員グループの継続教育のための機関として、また国民学校教員養成のための特別な養成機関として、さらに総合大学へ入学するまでに必要な中間的な機関として、最後にすべての教員のための職業学校としても要求された。したがって、シュプランガーだけを教育アカデミーの精神的な父あるいは創始者と考えることはできないが、彼が国民学校教員養成の理論的な基礎づけにおいて、それ以前の草案を凌ぐ独自の陶冶論的な基礎を築いたという点で、ドイツの国民学校教員養成に貢献をしたことは否定できない。このように、ドイツ教員養成史におけるシュプランガーの評価は様々である。そこで、まず全国学校会議を中心にしてシュプランガーとベッカーとの関係分析を行い、プロイセンに教育アカデミーが設立されるまでの経緯を概観し、従来一般に考えられてきた通説が正しかったかどうかを検証していきたい。

2. 全国学校会議でのかけひき

『教員養成論』が公刊された後、国民学校教員団はその著書が彼らが主張してきた総合大学での国民学校教員養成に反対するものであることに気づき、シュプランガーに厳しい批判を浴びせるようになった。公刊から半年後の1920年6月11日から19日にかけて、全国学校会議が開催されたが、この会議はシュプランガーにとって、『教員養成論』の出版によって失われた名誉を挽回する絶好の機会であった。すでにシュプランガーは、1920年4月から、定年退官した敬愛する恩師アロイス・リール (Alois Riehl, 1844-1924)の後任として、母校のベルリン大学の哲学及び教育学の教授に就任し、精力的な活動を開始していた。しかし、彼にとって、同年の1月に出版された『教員養成論』が世間の不評を買っていることは、気がかりの種であった。前述したように、ライプツィヒ教員連盟の厳しい攻撃とキューネルの論駁書は、彼に一時全国学校会議へ出席しない決意をさせるほどの精神的打撃を与えていた⁽¹⁾。しかし、彼は全国

学校会議を、自分が今直面している教員養成の問題を打開する唯一の機会であると考え、また2月23日付のベッカーからの手紙にも励まされて、再び気持ちを取り直し、十分な作戦を練った上でこの会議に臨んでいったのである。

シュプランガーは、この会議を円滑に進めていくために、会議の直前にベッカーに会い、個人的な打ち合わせをすることを依頼している。ベッカーは、このシュプランガーからの依頼を、1920年6月6日付の手紙⁽²⁾の中で承諾している。ところが、1954年8月5日付のシュプランガーからヴェンデ (Erich Wende) への手紙の中には、全国学校会議の直前に、シュプランガーとベッカーとの間で行われた話し合いでは、ベッカーは、その会議で提案する予定の新しい構想を腹案としてもっていながら、その内容については頑なに何も話さなかったことが記されている⁽³⁾。そのために、シュプランガーは、プロイセン文部省がその会議で達成しようとしていた目的を知らされないまま会議に臨まなければならなかった。彼は、このことについて同じ手紙の中で、「それ以来、ベッカーと私との間には、軽い緊張関係が存在していました⁽⁴⁾と記している。シュプランガーは、この時ベッカーが新しい教員養成を青年運動とその精神の上に基礎づけようと構想していたことを後から知っている⁽⁵⁾が、いずれにせよ、この時のベッカーのシュプランガーに対する行動は、2人の間に新たな溝を形成する原因となった。マイヤー・ヴィルナーも、「このことは、彼らの間の個人的な関係に決定的な光を投げかけるのであるが、2人の間の関係は、けっして相互の信頼によるものではなく、むしろ、いつも相互の『探り合い』によって特徴づけられる⁽⁶⁾と述べている。こうして、全国学校会議でベッカーを背後から援護しながら協力しようと考えていたシュプランガーの期待は裏切られ、彼は会議の中で孤立し、他の協力者を捜さなければならない立場に立たされた。

シュプランガーのこの会議でのねらいは、『教員養成論』の中に述べられているような論拠に基づいて、教育者養成大学設立の必要性を再度提案することにあつた。そのために、彼は6月14日、教員養成問題部会で基調講演を行い、総合大学は純粋な理論的、学術的研究を行うことを目的とし、人格の全面的陶冶を目的とした国民学校教員養成機関としてはふさわしくないとして、総合大学から独立した教育者養成大学の設立を提案した。

しかし、会議の経過を見てみると、そこにはかなりのかけひきが行われており、シュプランガーのこの会議に臨む並々ならぬ決意がうかがわれる。この会議の様子は、「1920年6月11日から19日に行われた全国学校会議への私の参加」(Meine Beteiligung an der Reichs schulkonferenz. 11-19. Juni 1920) というタイトルで書かれ、会議の3日後の6月22日に完成した原稿の中に述べられている。また、「全国学校会議」というタイトルの手書きの原稿も残されている。そこで、ここでは、前者の原稿に基づきながら、会議の経過やその舞台裏について述べていきたい。

シュプランガーは、会議の前日の1920年6月10日、2つの協議に出席している。1つは、大学で養成された教員との協議であり、彼はこの協議に出席することによって、できるだけ多くの教員を自分の味方につけようと努めている。彼はまた、その日の夕方、全国学校会議の大学の代表者たちを予備会議を開いて勧誘し、国民学校教員養成が総合大学で行われるようになると、総合大学の将来は危機に晒されることになるので、大学教授はこれに対して責任意識をもたなければならないと講演している⁽⁷⁾。このように、彼は、教員養成に対する自分の意見を承認させるために、会議の前日から周到に準備し、会議が自分にとって有利に展開するよう配慮している。

シュプランガーによれば、会議の第1日目(金曜日)は、それぞれの陣営がお互いの立場を

主張し、非常に激しい雰囲気の中で論争が行われ、痛ましい階級闘争が繰り広げられた。彼は、会議の間の休憩時間にテヴス (Johannes Tews, 1860-1937) と会話をしているが、その時テヴスは、その会議で国民学校教員がシュプランガーを味方から失つことを残念に思い、シュプランガーは彼らから存在してほしくない存在になっていたことが、後世、教育史に刻まれることになるであろうと話している。これに対して、シュプランガーは、「いずれにせよ、物事は何かある社会的偏見から生じるものではなく、国民教育に必要とされるものについての最も内面的な確信から生じるものです。ですから、私たちは、友人として別の道を歩みましょう」⁽⁸⁾と応えている。このように、シュプランガーにとって、第1日目の会議は不毛な階級闘争に終わり、満足のいくものではなかった。

第2日目(土曜日)は、午前中ハルナック (Adolf Harnack, 1851-1930) が、シュプランガーの『教員養成論』の立場に基づいて基調講演を行っている。その後、シュプランガーは、午後大部分の国民学校教員を第2室へ集めることに成功している。彼はこの会議の中で、「少し戦略的な予備会議を行った後、私は、誰か私の意見に反対して教育学部に賛成する気持ちがあるかどうか直接尋ねた」⁽⁹⁾と述べている。これに対して多くの反対意見が出され、特にユダヤ人の会員が強力な反対意見を述べた。これらの反対意見に対して、シュプランガーは、ひるむことなく自分の意見を主張し、国民学校教員に対して、ある程度効果的な影響を与えることができたと感じている。そして、彼は、その時の会議の様子を、「ブランディ (Karl Brandi) は、私の努力に感謝し、論敵の一部は私におべっかを使い、その結果、私は根本において彼らが意見を異にするものではないことを確信した」⁽¹⁰⁾と述べている。このように、シュプランガーにとって、第2日目の会議は、かなり満足のいくものであり、会議の前に意図していた目的に一歩近づくものであった。

第3日目(日曜日)、シュプランガーは会議の始まる前、日当たりのよいティアーガルテンに座って過ごしている。その日の会議は11時に始まっているが、ほとんど重要なことはなかった。午後4時以後、彼は翌日の講演の草案を立てたが、うまく構成できたと感じている。午後5時30分にアロイス・リールのところへ行って1時間半過ぎた後、夜は翌日の大きな闘いの日 (Großkampftag) のためにすべての準備を整えた。

第4日目(月曜日)の6月14日にシュプランガーが行った基調講演は、この会議での彼の成否を決定するほどの重要な意味をもっていた。この講演はかなりの成功を修め、ほとんどの出席者から賞賛をあげるようになった。特に、ベルリン大学哲学部長トレルチ (Ernst Troeltsch, 1865-1923) とベッカーは、この講演を賞賛している。コネフケ (G. Koneffke) のような厳しい批評家でさえ、「シュプランガーは、国民学校教員団を極めて大きな影響力をもって巧みに操った。彼の講演は傑作であった……」⁽¹¹⁾と、シュプランガーの講演の巧みさを絶賛している。彼はこの基調講演の中で、学歴は人間の価値を決める決定的なものではないという論拠から出発し、総合大学と教育者養成大学は異質ではあるが同等の価値をもっていることを主張し、総合大学とは別の課題をもつ国民学校教員養成のための特別な大学を設立する必要があることを巧みに導き出している。彼によれば、真の教育者は、学問探究の精神をもち続けながら、他方で広い意味での人間の教育者になるという重要な課題をもっている。そこで、この2つの要素を兼ね備えた教育者を養成するためには、純粋に学問のみを探究する総合大学でも、技術のみを鍛練する専門大学でもない第三の場所が必要である。それが彼の提唱する教育者養成大学であった。

以上のような論法で、シュプランガーは国民学校教員を説得し、ある程度の成功を修めるこ

とができた。しかし、彼らは心からそれに納得したわけではなかった。総合大学内での国民学校教員養成という彼らの積年の要求には根強いものがあり、それほど簡単に自分たちの要求を引き下げるわけにはいかなかった。また、シュプランガーの教育者養成大学の構想は、国民学校教員養成をも総合大学内で行おうとするプレツェルらの構想と対立し、両者の調整が難航したことと、国家財政が困窮していたことと相まって、結局両方とも実現するまでには至らなかった⁹²。それでも、シュプランガーが最も警戒していた、総合大学の中に教育学部を設置し、そこで国民学校教員養成を行うという国民学校教員団の要求も同時に阻止されたのである。

また、この会議でシュプランガーが、国民学校教員を説得する材料としてもち出したものは、教育者養成大学を卒業し、教育学研究や教育活動に功労のあった人々に対して、ドクトルの称号を与えるというものであった。しかし、シュプランガーのこれまでの主張によれば、教育者養成大学は学問研究を窮めることが目的ではなく、豊かな人格を有する教育者を養成することを目的としていたため、ドクトルの称号を取得するほどの学問研究を積むことは事実上ほとんど不可能であった。したがって、シュプランガーは、この案を真剣に考えて提出したわけではなく、国民学校教員を惹きつけ、教育者養成大学と総合大学が同等であることを印象づけるためにもち出してきたものと思われる。彼は、1957年5月27日付のレーブレへの手紙の中で、「私は、1920年の全国学校会議において、教員養成大学（Lehrerhochschule）による教育学博士の学位授与の可能性に賛成しました⁹³と記している。しかし実際には、彼は、総合大学で伝統的な価値をもつ哲学博士を重視し、教育学博士はそれほど重視していなかったのである⁹⁴。

第6日目(水曜日)になってはじめて総合大学の研究の問題が話題になった。シュプランガーは、総合大学は学生数が多過ぎるために、どうしても学問的レベルが低下しなければならないことを非常に注意深く詳細に説明した。しかし、投票の結果、教育学部（勝利）と教育大学（敗北）は否決された。すなわち、シュプランガーにとって、総合大学の中に教育学部を設置することが否決されたことは、かねてからの思惑通り勝利であったが、教育大学の否決は、『教員養成論』以来主張してきた総合大学以外の独立した大学で国民学校教員養成を行うという彼の主張が承認されなかったことになり、敗北を意味していた。以上のように、彼は全国学校会議で、当初の目的を達成することはできなかったが、それでも最後までその戦いに勝つ望みを捨てていなかった。彼は、1920年7月8日付のピールマンへの手紙の中で、「全国学校会議は、私にとって失われた立場を弁明することを意味していました。……それに反して、私が舞台の表と裏で達成したことはたくさんあります。しかし、全体的な印象としては、ここでも進歩の枠内で最良のものが破壊されるという一般的な傾向が勝っています⁹⁵と記している。このように、会議の中に支配していた全体的な傾向は、国民学校教員養成もギムナジウム教員養成と同様に総合大学の中で行うべきであるという意見が大勢を占めており、シュプランガーのこの会議における戦いは容易なものではなかった。それは、会議の前に第二の転向を行い、シュプランガーと同盟関係を結ぶはずであったベッカーが、プロイセン文部省の方針を頑なに打ち明けず、シュプランガーが会議の中で孤立した立場に立たされたこともかなり影響している。このように、この会議を通じて、シュプランガーのベッカーに対する不信感はさらに増幅されていった。

シュプランガーは、1920年8月3日付のホルツハウゼンへの手紙の中で、「私が全国学校会議の中で、かなり孤立しながら自分の立場を貫き通したことは、少なくとも私の性格にとって有益な訓練でした。なぜなら、私が見捨てられたものを擁護しなければならなかったのは、はじめてだったからです。もちろん財政は、すべての改革に厳しい限界を置くことになるでしょ

う。しかし、それ無しには改革は不可能であるという精神が存在しないという印象が、私をさらに憂鬱にさせました⁶⁾と記している。このように、彼は、「それ無しには改革は不可能であるという精神が存在しない」ことを嘆きながらも、当時の財政状況がすべての教育改革を実現不可能にしていること、すなわち、総合大学内での国民学校教員養成という計画をも実現不可能にしていることに対して、ある意味では安堵の胸をなで下ろしていたのである。

3. ベッカーの第三の転向と科学的教育学研究協会の設立

全国学校会議が終了した後、シュプランガーの教員養成に対する活動は弱まっていった。その第一の原因は、全国学校会議で彼の教育者養成大学の提案が受け入れられなかったことに対する失望感であり、第二の原因は、1914年に第1版が出版された『生の諸形式』の改訂の準備に取りかかることであった。

全国学校会議では、プレッツェルがシュプランガーの教育者養成大学構想に対して、国民学校教員養成も総合大学内で行うべきことを主張して対立し、両者共、参加者の支持を得て調整が難航したため、実現するまでには至らなかった。しかし、プレッツェルは、1920年6月の全国学校会議が終了した後、11月に行われる予定の全国学校会議の決議に関連したドイツ教員連盟中央教育会議 (eine Sitzung der Pädagogischen Zentrale des Deutschen Lehrervereins) に出席するようシュプランガーに依頼した。シュプランガーは、それまでドイツ教員連盟やライプツィヒ教員連盟から、度々不愉快な印象を与えられていたため、この依頼に応ずるべきであるかどうか迷ったが、最終的に彼は、国民学校教員にもう一度はつきりと自分の考えを述べる必要があると考え、この会議に出席することを承諾した。しかし、1920年10月29日と11月27日付のシュプランガーからハートリヒへの手紙によれば、この中央教育会議への出席は、やはりシュプランガーに不愉快な印象を与えた¹⁾。しかし、このことが、『生の諸形式』の完成後、ベッカーとの交流を再開し、彼を再び教員養成の問題へと立ち向かわせるきっかけとなった²⁾。しかし、前述したように、6月の全国学校会議の前に、ベッカーがシュプランガーに対してプロイセン文部省の方針を打ち明けず、その結果、シュプランガーが会議の中で孤立した状態になったことは、彼のベッカーとプロイセン文部省に対する不信感を募らせる大きな要因となっていた。シュプランガーは、1920年12月29日付のケルシェンシュタイナーへの手紙の中でも、「私はベッカーとの最初の経験以来、この外的にも内的にも変転しがちな文部省と協力して仕事をすることに、ほとんど好感をもっていません³⁾」と記している。

彼は、教員養成の問題の中に非常に不純なものを感じていた。なぜなら、ドイツ教員連盟の指導者たちは、「彼らの職業を実現できない要求によって袋小路へと導き、それを不満足という不毛の『精神』で満たした⁴⁾」からである。そのために、彼は、親しい友人であり、しかもドイツ教員連盟の代表者で、この問題における彼の反対者でもあるプレッツェルと教員養成の問題について話し合っている⁵⁾。しかし、この問題は、両者にとって解決の見通しのつかない困難な問題であった。

全国学校会議以後、シュプランガーとベッカーとの間は、一時冷えた関係になっていたが、1921年10月31日付のベッカーからシュプランガーへの手紙によって交流は再開された。これがベッカーの第三の転向である。シュプランガーは、このベッカーからの手紙に対して、11月8日に返事を書き、次のように述べている。「しかし、特に私は、あなたが教員養成について述べていることを嬉しく思わなければなりません。なぜなら、それは私がちょうど2年前に、教員界全体の嫌悪感の中で提案したことと原則的に一致しているからです。ご存じのように、私

は長い間、あなたがこの方向に帰ることを期待していました」⁽⁶⁾。シュプランガーは、さらにこの手紙の中で、当時「プロイセンの大学附属教員養成所教員の覚え書」(Denkschrift der Akademischen Seminarlehrer Preußens) とケルシェンシュタイナーの「教育者の魂と教員養成の問題」(Seele des Erziehers und das Problem der Lehrerbildung) がほとんど同時に出版され、彼が『教員養成論』の中で論述したような教員養成の形態が主張されるようになってきており、1848年に要求されたような総合大学内での国民学校教員養成の形態は、もはや若い教員の世代から支持されなくなるであろうことをドイツ教員連盟が認識しなければならないと述べている。そして、「私は、この真に新しい創造の準備をするために、かなり明確な計画を立案しました」⁽⁷⁾と述べて、ベッカーの意見をうかがっている。

このように、ベッカーが教員養成政策を度々転換しているにもかかわらず、シュプランガーはベッカーの第三の転向を素直に喜び、新たに大学で教育学を担当する教員を養成するための機関として、「科学的教育学研究協会 (Studiengemeinschaft für Wissenschaftliche Pädagogik)」の設立計画を立案している。ベッカーは、政治的、経済的な状況の変化に応じて、これで3度自らの立場を変更したことになるが、マイヤー・ヴィルナーは、このようなベッカーの度々の転向を「日和見政策」(Schaukelpolitik) と呼んでいる⁽⁸⁾。

ベッカーは、このシュプランガーの「科学的教育学研究協会」の設立計画を、それほど歓迎したわけではなかったが、シュプランガーはこの設立計画に取りかかっている。彼は、1921年12月21日付のケルシェンシュタイナーへの手紙の中で、この設立計画について、「(私は、) 将来教員養成機関 (Lehrerbildungsanstalt) で、教育学を教える大学教員を養成するための教育アカデミーを、中央研究所と結合して設立する計画を立てています。……今、明らかに1919年の私の立場に立っているベッカーは、その計画に賛成しました」⁽⁹⁾と述べている。このように、シュプランガーは、教育学を教える大学教員を養成するために、中央研究所やベルリン大学と結合した機関を設立することが必要であると考えた。

彼は、この機関を「科学的教育学研究協会」と名づけ、2つの2年コースを設置し、1922年の復活祭の日に活動を開始した。しかし、プロイセンの教員連盟は、最初からこの活動を歓迎せず、特にシュプランガーによる機関の独占的な指導を批判した。1922年3月23日のプロイセン教育新聞第35号に掲載された論説は、このことを証明している。すなわち、その新聞には、「私たちは、シュプランガー教授のお人柄を尊敬しているし、彼の学問的才能を歓迎している。しかし、1人の人物が、たとえどんなに地位の高い人であれ、大学教員の養成をどのようにするかというような重要な問題について、唯一人で決定的な助言を与えることができるということは、私たちには正しいこととは思われない。……私たちは、すべての行動が非常に奇異の念を起こさせるものであることを告白しなければならない」⁽¹⁰⁾と書かれていた。

このように、シュプランガーによって設立された科学的教育学研究協会は、国民学校教員にあまり歓迎されていなかったため、プロイセン政府からもそれほど積極的な援助は行われなかった。それは、第一次世界大戦後のドイツが、財政的に困窮していたことと、プロイセンに総合大学から独立した特別大学の制度が、まだ十分確立されていなかったことにもよる。しかし、主要には、当時ドイツ教員連盟から敵視されていたシュプランガーを表立って援助することが、国民学校教員の反発を買うようになることを、プロイセン政府が警戒したことによるものであった。

それにもかかわらず、シュプランガーは、大学で教育学を担当する教員が不足していることを補うために、科学的教育学研究協会を設立し、そこで国民学校教員養成のための人材を育成

しようと努力した。そして、このような人材を、彼が構想した教育者養成大学のような特別大学に送り込んで、国民学校教員養成を行おうと考えていたのである。

4. シュプランガーとベッカーの関係のその後の進展と教育アカデミーの設立

ベッカーの第三の転向によって、シュプランガーとベッカーとの関係は再び回復し、しばらくの間、良好な人間関係が続いていくことになる。シュプランガーは、1922年5月12日付のハートリヒへの手紙の中で、次のように記している。「先週の土曜日、文部省のベッカーの所でお茶を飲みました。私たちは、ハインリヒ・シュルツ (Heinrich Schulz) と興味深い話し合いをしました。私は、彼の学校政策の核心を一瞥しました。私たちは、それほど遠くには立っていませんし、彼はライプツィヒ教員連盟に対して、私と同じように考えています。ベッカーも同様です。ですから、ドイツ教員連盟は孤立しています」⁽¹⁾。また、1922年10月23日付のハートリヒへの手紙には、「私は午後、文部省でベッカーと十分な時間話し合いました。私たちは今、私が提案した意味で、教員養成の形態について意見が一致しています（ですから、文部大臣⁽²⁾も意見が一致しています）。しかし、大蔵大臣は、この計画にけっして賛成しようとはしません。— 彼は、国民学校教員のアビトゥーアをけっして承認しようとはしません」⁽³⁾と記している。これら2つの書簡から読み取れるように、この当時シュプランガーとベッカー、シュプランガーとプロイセン文部省との関係は、非常に友好的なものであった。教員養成に関しても、シュプランガーと文部大臣のベーリッツ (Otto Boelitz, 1876-1951)、文部次官のベッカーとはほぼ意見が一致し、話し合いも円滑に進んでいた。ただ、財政を管理する大蔵大臣は、国民学校教員を総合大学で養成することには難色を示した。当初から、総合大学での国民学校教員養成に終始反対し続けていたシュプランガーにとって、このプロイセン政府の決断力と行動力の無さは好都合であった。結局、政府は財政的な理由から、総合大学での国民学校教員養成を断念し、シュプランガーが提案したように、総合大学から独立した機関での国民学校教員養成を模索せざるを得なかった。

その後、シュバルツ (H. Schwartz) の指導のもとで教育大学についての部厚い覚え書が計画され、シュバルツはシュプランガーに、そのための理論的な基礎理論を提供する気持ちがあるかどうかを尋ねている。しかし、その際、大蔵省が財政を管轄していたため、シュバルツはシュプランガーに教育大学を必ず設立することができるとは確約できなかった。このシュバルツの要請に対して、シュプランガーがその基礎理論を実際に提供したかどうかは今日まで明らかにされていない。ただ、1923年4月15日付のハートリヒへの手紙の中で、シュプランガーは、「私はその覚え書とは非常に見解が異なっており、2年では十分ではないと考えています」⁽⁴⁾と述べており、彼が何らかの形でそれに関わっていたことが推測される。しかし、1926年にシュバルツによって書かれた2つの論文⁽⁵⁾によっても、シュプランガーがこの覚え書にどの程度関与していたかを証明することはできない。

いずれにせよ、シュプランガーは国民学校教員養成のための大学が、2年間では不十分であると考えていた。『教員養成論』の中で提唱されている教育者養成大学も、3年間の在学期間で構想されていた。したがって、このシュバルツの指導のもとで作成された覚え書は、彼にとって満足できるものではなかった。その上、ベッカーは、全国学校会議の時、事前にシュプランガーに打ち明けなかった「新しい教員養成を青年運動とその教育精神の上に基礎づける」という腹案を今だにもち続けており、青年運動に対してかなり批判的な気持ちをもっていたシュプランガーにとって、それが自分の構想と相違したものであったことが予想される。

シュプランガーは、ドイツ青年運動の中に、功罪両面を見ていた。1913年10月11日と12日の両日、カッセルのホーエル・マイスナー丘上で行われた青年運動の大会では、「自由ドイツ青年は、自己の決定から、自己の責任で、内的誠実さをもって自己の生活を形成することを欲する。彼らはいかなることがあっても、団結してこの内的自由を守り続ける」⁽⁶⁾というマイスナー宣言が決議された。このマイスナー宣言の中に見られるように、青年運動の中には、絶対的誠実、責任ある自己教育の重要性、倫理的意味における自由などに対する信仰の精神が存在し、ドイツ理想主義の精神に基づいた積極的な意義を見出すことができる。

それにもかかわらず、シュプランガーは、「しかし、私は、固有の青年運動の影響がこの方向にのみ進んで行ったということを、断固として疑いたい」⁽⁷⁾と述べ、この青年運動の中に、文化への否定精神がますます強く現れたことを指摘している。すなわち、彼によれば、「人は意識的に所与の成熟した文化との対決から遠ざかり、本来、学ぼうともせず、また、事実あまり多くを学ばなかったので、厳しい現実の中では、いろいろな失望が起こらざるを得なかった。もちろん、失望が後になってはじめて意識された時には、それはもっとひどいものになっていた。渡り鳥の結婚は、おそらく平均して今日の結婚より不幸なことはなかったであろうが、幸福でなかったことも確かである」⁽⁸⁾。すなわち、シュプランガーは、青年運動が青年たちの主観的な体験と生命感情に基づいた理想主義的、浪漫主義的な熱狂であると考え、その中に所与の文化との対決による生産的な意義を見出すことができなかつたのである。

このような青年運動とその教育精神を教員養成改革に生かそうとするベッカーと、それに比較的批判的な姿勢をとるシュプランガーとの間には、徐々に疎遠な関係が形成されていった。1923年1月と2月の文通以後、2人への往復書簡が突然とだえている。その後、「1924年5月に行われたリヒター（Richter）の学校改革の覚え書に関するベッカーによって主催された会議についての報告」の中で、シュプランガーは、1924年5月25日、ハートリヒに対して次のように記している。「ベッカーは、すべての会議で議長として、おべっか使いの剣士のように振舞いました。（私は彼に）極めて好ましくない印象を受けました。彼は本当に、それほど判断力が無いのでしょうか。彼は義務に忠実な官吏としてのみ弁明するのでしょうか。……ベッカーについていえば、それはまるでくらげをつかむかのようです」⁽⁹⁾。この手紙の中には、終始一貫した信念に基づいて行動しないベッカーに対するシュプランガーの不信感が読み取れる。それは、それまで状況に応じて何度も自分の立場を変更してきた1人の人間としてのベッカーに対する彼の不信感の表明でもあった。

1925年2月初めにベッカーが文部大臣に昇格すると、2人の関係はさらに険悪になっていった。それまで文部次官の地位にあったベッカーは、文部大臣ベーリッツの指示に従って行動していたが、自らが文部大臣の地位に就くと、自分の意志でプロイセンの教育行政に取り組むことができるようになった。ベッカーは文部大臣就任後、廃止された国民学校教員養成所の教員を一時免職させる措置をとっているが、シュプランガーは新聞記事の中でこの措置に反対することを表明し、1925年3月13日、「長い間心の中で吟味した後」、「良心に抵触するのを感じ、2月6日の勅令に対して、公に反対の立場をとること」を文部大臣のベッカーに宛てて書いている。また、彼はこの手紙の中で、「誰かが新聞記事に書くことを自分に勧めたのではなく、彼の「自由な衝動から行った」ことも強調している⁽¹⁰⁾。これ以後、シュプランガーは、プロイセン教育アカデミーの設立には協力しなくなつたし、ベッカーもシュプランガーの学校改革への提案を何度も無愛想に拒否し、2人の関係はますます疎遠になっていった。そのために、シュプランガーは、前文部大臣のベーリッツの力を教員養成改革のために動員しようとしたが、そ

のことが2人の関係をさらに悪化させた。

シュプランガーは、彼の再三再四の注意や警告に耳を傾けようとしないうベッカーについて、次のように述べている。「教員養成所は解体される。それと同時に、大部分の価値ある文化は排除される。私たちが久しい以前から性急に待ち望んでいる新しいものは、どこに存在するのであろうか。あるいは、ドイツ国民のこの運命の年にあつて、将来の国民教育がどのようになるかはどうでもよいのであろうか。今まさに、ドイツの教育のこの重要な部分を休止することができるのであろうか。国民教育のためにプロイセンの文部大臣が、再三再四注意し警告する声を聞き流すことはできない。それは、今日重大な問題である。遅れると危険である！」¹¹⁾。しかし、このようなシュプランガーのベッカーへの要請は何の効果もなかった。

ベッカーは、文部大臣に就任してまもなく、中央研究所で会議を開催し、関係者を招いて青年運動と将来の教員養成の関係について討議した。その会議の基調講演は、クラット (Fritz Klatt) が行ったが、彼は青年運動の代表者として、計画することのできる教員養成の形態や内容を青年運動の精神から導き出すよう努力した。しかし、その後グアルディーニ¹²⁾ (Romanio Guardini, 1885-1968) が講演を行い、クラットの講演に対して鋭い反論をした。シュッフハルト (W. Schuchhardt) は、その時の様子を次のように述べている。「シュプランガーは、確かな基準をもったこの講演に明らかに魅了されていた。彼は、これ見よがしにグアルディーニの所へ行き、彼と握手をしたが、私たちはこれに大変驚いた。なぜなら、それは本来私たちが考えていることだと思うからです」¹³⁾と。この場合、シュプランガーがグアルディーニと握手をしたかどうかは、それほど重要な問題ではない。むしろ重要なのは、彼がグアルディーニと握手をするという示威的な行為によって、教員養成を青年運動とその教育精神の上に基礎づけようとするベッカーの意図をはっきりと拒絶しようとしたことである。その上、シュプランガーは、ベッカーが主催したこの会議を、ベッカーによって上演された「教育の謝肉祭 (pädagogischer Karneval)」¹⁴⁾と呼んで嘲笑している。

こうして、シュプランガーとベッカーとの間の決裂は、修復しようのないものとなつていった。1925年9月24日と25日の両日、教育アカデミーを設立するための決定的な会議が開かれているが、シュプランガーはこの会議に招待されていない¹⁵⁾。また、ベッカーは、この頃完全に決定された教育アカデミーの計画書をすでに所有していた¹⁶⁾し、教育アカデミーが公式に誕生する証拠書類となるドウリーシュによって書かれた覚え書¹⁷⁾は、シュプランガーに送付されていない。シュプランガーは、1925年8月23日付のケルシェンシュタイナーへの手紙の中で、この件について次のように記している。「あなたは、教員養成に関するプロイセン文部省の新しい覚え書をすでにご覧になりましたか。それは私には送付されて来ませんでした。私が気分を害していることが、あなたにはおわかりでしょう」¹⁸⁾。このように、シュプランガーはベッカーから無視されたにもかかわらず、10月に入って、この件をベッカーに直接問い合わせている。そして、彼は1925年10月12日付のハートリヒへの手紙の中で次のように記している。「(私は、) まったく愚かにも、その覚え書をどこで手に入れることができるのか大臣に尋ねました。そうすると、それを書いた省参事官 (Ministerialrat) のフォン・デン・ドウリーシュが私にその覚え書を送ってきて、私を訪問するように告げました。しかし、私は、もちろん彼を訪問するつもりです」¹⁹⁾。

以上の事実から、シュプランガーが、1926年のプロイセン教育アカデミーの設立に直接関与していなかったことが証明される。その上、シュプランガーが構想していた教育アカデミーとベッカーによって実際に設立された教育アカデミーとの間には、表1のような相違が存在して

いた。

両者に共通する点は、国民学校教員養成を行う場所だけである。すなわち、ベッカーも最終的には、教育アカデミーという総合大学から独立した機関で国民学校教員養成を実施しようとした点では、シュプランガーと共通している。その意味では、シュプランガーが1919年に『教員養成論』の中で提唱した教育者養成大学の構想が、1926年に教育アカデミーとして実現されたものとも考えられる。しかし、すでに述べたように、元々ベッカーは、総合大学の中で国民学校教員養成を行うことを主張していたのであって、彼がシュプランガーと国民学校教員団の2つの主張の間を揺れ動きながら、最終的に教育アカデミーの形を選択したのは、むしろ大蔵省が財政的な理由から総合大学内での国民学校教員養成に反対したことと、総合大学自体がその中で国民学校教員養成を行うという国民学校教員団の要求を何度も拒否したことによるものであった。したがって、ベッカーが国民学校教員養成の方向を状況に応じて何度も転換し、ある時はシュプランガーの教員養成論を吸収しながら、国民学校教員団の要求に対抗しようとしたのは、上述したような理由によるものと考えられる。その際、シュプランガーの教員養成論は、総合大学から独立した国民学校教員養成機関を設立するための理論的根拠として利用された。

表1 シュプランガーが構想していた教育アカデミーとベッカーによって設立された教育アカデミーの相違

	シュプランガー	ベッカー
在学期間	3年	2年
教育の立場	従来の教員養成所を継承しながら改善する立場	大学での一般教育を重視する立場
授業時数	1学期で22週時間	1学期で36週時間
教育内容	本質的な教育内容に重点を置いた学習	国民学校の教科のすべての学問領域を学習
理論と実践との関係	専門的研究と教授学的-方法的な養成の分離	専門的研究と教授学的-方法的な養成の統一
宗教	宗派別のアカデミー（プロテスタント、カトリック、宗派共同の別）	宗派共同のアカデミー

5. 結語

以上の論述から、1926年に設立されたプロイセンの教育アカデミーは、直接的にはベッカーの力によるものであり、シュプランガーはそれが設立された時点では、直接関与していなかったことが明らかになった。シュプランガーの教育アカデミーに対する功績は、『教員養成論』によって陶冶論的に基礎づけられた国民学校教員養成のための原案を提出し、それが国民学校教員との議論に大きな波紋を投げかけたことである。総合大学の中で国民学校教員養成を行おうとする国民学校教員団の強い要求に対して、彼が何とかそれを阻止しようと努めたことは、全国学校会議における彼の巧みな戦略や、ベッカーに対して教育者養成大学の必要性を説く彼の努力の中によく表れている。しかし、彼の努力は、プロイセン教育アカデミーの設立に直接関与してはいなかった。彼の教育アカデミーへの影響力は、ベッカーとの関係が疎遠になるにたがって弱くなり、1926年に教育アカデミーが設立された時点では、彼の構想はほとんどそ

の中に生かされていなかったのである。

とは言いながら、シュプランガーが『教員養成論』の中で、総合大学から独立した国民学校教員養成機関として教育者養成大学の設立を提唱し、その後も全国学校会議やプロイセン文部省との交渉を通して、間接的に教育アカデミーの設立に影響を与えたことは否定できない。したがって、「シュプランガーは、プロイセン教育アカデミーの『精神的な父』と呼ばれるべきではなく、数人の『継父 (Stiefvater)』の1人と呼ばれるべきであるに過ぎない」⁽¹⁾というマイヤー・ヴィルナーの仮説は一部修正され、「シュプランガーは、プロイセン教育アカデミーの設立には直接関与していなかったが、総合大学から独立した国民学校教員養成機関として教育者養成大学の設立を提唱し、その後も終始一貫してその論理を主張し続け、プロイセンの国民学校教員養成に大きな波紋を投げかけたという点において、間接的に教育アカデミーの設立に関与した」という結論が導き出されるのである。

さて、もう一度シュプランガーとベッカーとの関係に戻ってみよう。1927年6月6日付のシュプランガーからハートリヒへの手紙によると、ベッカーはシュプランガーを「特別な榮譽をもって」⁽²⁾待遇したにせよ、2人の関係は形式的な関係にとどまったままで、けっして親密で個人的な関係まで深まることはなかった。また、1930年6月14日付のシュプランガーからハートリヒへの手紙によれば、ベッカーがその在任中、シュプランガーを一度も食事に招待しなかったのに対して、その後任のグリメ (Adolf Grimme, 1889-1963) は、シュプランガーを食事に招待したことが強調して述べられている⁽³⁾。実際に彼は、ベッカーよりも「グリメとより親しく」なった⁽⁴⁾。

このようにシュプランガーは、ベッカーの後任のグリメを引き合いに出してまで、ベッカーとの人間関係が円滑に進まなかったことを強調しているが、それはどのような理由によるのだろうか。最大の理由は、ベッカーがシュプランガーの教員養成に関する学校政策的、大学政策的な要求や立場を進んで受け入れようとしなかった点にある。すなわち、ベッカーは、常にプロイセン文部省、ドイツ教員連盟、総合大学などの動きを全体的に眺めながら、教育行政官としてその時々状況に応じてとるべき措置を決定した。したがって、彼の取った政策は、マイヤー・ヴィルナーも指摘しているように、「日和見政策」的であり、状況に応じて度々変化した。このようなベッカーの行動の仕方は、教員養成に対して常に終始一貫した姿勢を貫こうとするシュプランガーから見れば、自己自身の主義主張をもたない、つかみどころのない「くらげ」⁽⁵⁾のような行動に映ったに違いない。状況の変化に応じて度々方向転換するベッカーの変わり身の速さは、シュプランガーにとって人間として信頼するに足りないものであった。他方、ベッカーから見れば、いつも大学教授として指導的な立場で振舞うシュプランガーの態度は、けっして快いものではなかった。シュプランガーは、1931年8月1日付のハートリヒへの手紙の中で、ベッカーと「2、3回、おそらく彼にとって有益な出会い」⁽⁶⁾をしたと記しているが、このような大学教授として指導的な立場で振舞うシュプランガーの態度は、彼より6歳年長のベッカーにとって、けっして快いものではなかったであろう。

その30年後、シュプランガーは、1961年8月30日付のリヒター (U. Richter) への手紙の中で、ベッカーとの関係を回顧的に振り返りながら、次のように記している。「私に関していえば、実際、C. H. ベッカーに対して、けっして肯定的な関係をもつことはできませんでした。私たちがお互い、実際に行為しなければならぬ期間が長くなればなるほど、お互いの立場の相違は、ますます大きくなりました。しかし、私たちは、静かで気高い関係に満足していました」⁽⁷⁾。

従来のドイツにおける先行研究では、シュプランガーとベッカーとの関係は、ほとんどの文

献で良好な協力関係にあったと述べられてきた⁽⁸⁾。しかし、これまでの書簡による分析から明らかになったように、両者の関係はけっして順調なものではなく、何度も紆余曲折を繰り返しながら、最後まで親密な個人的関係に至ることはなかったのである。そして、このような2人の緊張関係が、1920年の『教員養成論』の出版と1926年の教育アカデミーの設立に、極めて重大な影響を与えている。

注

1. 問題の所在

- (1) G. Meyer-Willner: Eduard Spranger und die Lehrerbildung, Die notwendige Revision eines Mythos, Verlag Julius Klinkhardt, Bad Heilbrunn, 1986, S. 215.
- (2) Brief von E. Spranger an K. Hadlich vom 22. 12. 1919. (BAK)
- (3) GS. Bd. 7, S. 145.
- (4) Brief von E. Spranger an P. Althaus vom 29. 1. 1961. (BAK)
- (5) G. Meyer-Willner: a. a. O., SS. 216-217.
- (6) ibid., S. 217.
- (7) A. Riekkel: Die Akademische Lehrerbildung, 1931, 2. Aufl, S. 5 und S. 54.
- (8) W. Flitner: Das Pädagogikstudium an der Pädagogischen Akademie. In: Die Erziehung 4, 1929, SS. 228-237 und 361-368.
- (9) W. Flitner: Die Entwicklung der Pädagogischen Akademien. In: Die Erziehung 8, 1933, SS. 447-453.
- (10) Vgl. E. Weniger: Denkschrift über der Wiederaufbau der akademischen Lehrerbildung. In: Die Sammlung 1, 1945/46 a, SS. 20-31 und 95-114.
Derselbe: Rede zur Eröffnung der Pädagogischen Hochschule Göttingen (am 8. Februar 1946 in der Aula der Universität). In: Die Sammlung 1, 1945/46 b, SS. 670-681.
- (11) Vgl. O. Haase: Die Situation der Lehrerbildung. In: Die Schule 1, 1946, SS. 27 - 31.
Derselbe: Die Erneuerer der Volksbildung. In: Schauder, 1950, SS. 72-76.
- (12) H. Kittel: Die Idee der Pädagogischen Hochschule. In: Um die Tutzingen Empfehlungen für die Lehrerbildung. Schriftenreihe der Pädagogischen Studienkommission der Studiengemeinschaft der Evangelischen Akademien. Heft 1. Frankfurt/Berlin/Bonn o. j. 1955, S. 6.

2. 全国学校会議でのかけひき

- (1) Brief von E. Spranger an K. Hadlich vom 4. 2.. 1920. (BAK)
- (2) Rep. 92 Becker 4855. (GSAB)
- (3) Brief von E. Spranger an E. Wende vom 5. 8. 1954. (BAK)
- (4) Brief von E. Spranger an E. Wende vom 5. 8. 1954. (BAK)
- (5) G. Meyer-Willner: a. a. O., S. 269.
- (6) ibid., S. 270.
- (7) E. Spranger: Meine Beteiligung an der Reichsschulkonferenz. 11.-19. Juni 1920, S. 226f..

- (8) *ibid.*, S. 227.
- (9) *ibid.*, S. 228.
- (10) *ibid.*, S. 228.
- (11) G. Koneffke: Die Reichsschulkonferenz von 1920. In: H. J. Heydorn/G. Koneffke: Studien zur Sozialgeschichte und Philosophie der Bildung, München, 1973, Bd. 2, S. 267.
- (12) 山崎英則「生涯」村田昇編『シュプランガーと現代の教育』玉川大学出版部、1995年、16ページ。
- (13) Brief von E. Spranger an A. Reble vom 27. 5. 1957. In: GS. Bd. 7, S. 317.
- (14) Vgl. L. Englert (Hrsg.): Georg Kerschensteiner-Eduard Spranger, Briefwechsel 1912-1931, S. 248 und S. 246f.
- (15) Brief von E. Spranger an W. E. Biermann vom 8. 7. 1920. (BAK)
- (16) Brief von E. Spranger an H. Holzhausen vom 3. 8. 1920. In: GS. Bd. 7, S. 104f..

3. ベッカーの第三の転向と科学的教育学研究協会の設立

- (1) Vgl. Brief von E. Spranger an K. Hadlich vom 29. 10. und 27. 11. 1920. (BAK)
- (2) Brief von E. Spranger an K. Hadlich vom 22. 12. 1920. (BAK)
- (3) L. Englert(Hrsg.): Georg Kerschensteiner-Eduard Spranger, Briefwechsel 1912-1931, S. 181.
- (4) *ibid.*, S. 181.
- (5) Brief von E. Spranger an K. Hadlich vom 2. 11. 1921. (BAK)
- (6) Rep. 92 Becker 4855. (GSAB)
- (7) Rep. 92 Becker 4855. (GSAB)
- (8) G. Meyer-Willner: a. a. O., S. 281.
- (9) L. Englert(Hrsg.): Georg Kerschensteiner-Eduard Spranger, Briefwechsel 1912-1931, S. 197.
- (10) Rep. 92 Becker 7333. (GSAB)

4. シュプランガーとベッカーの関係のその後の進展と教育アカデミーの設立

- (1) Brief von E. Spranger an K. Hadlich vom 12. 5. 1922. (BAK)
- (2) 1921年11月5日から1925年1月6日まで、プロイセンの文部大臣は、オットー・ベーリッツ (Otto Boelitz) であった。
- (3) Brief von E. Spranger an K. Hadlich vom 23. 10. 1922. (BAK)
- (4) Brief von E. Spranger an K. Hadlich vom 15.4.1923.(BAK)
- (5) Vgl. H. Schwartz: Die Lehrerbildungsfrage und ihre Lösung, Leipzig, 1926.
- (6) E. Spranger: Fünf Jugendgenerationen 1900-1949, 1950. In: GS. Bd. 8, 1970, S. 324.
- (7) *ibid.*, S. 324.
- (8) *ibid.*, S. 328.
- (9) Brief von E. Spranger an K. Hadlich vom 25. 5. 1924. (BAK)
- (10) Rep. 92 Becker 4855. (GSAB)
- (11) E. Spranger: Die "höhere" Bildung, 1924, S. 190.

- (12) グァルディーニは、イタリアのヴェローナで生まれたドイツのカトリック神学者、哲学者。ベルリン (1923-1939)、チュービンゲン (1945-1947)、ミュンヘンの各大学教授を歴任した。第一次世界大戦後、カトリック青年運動、典礼運動を指導し、ドイツカトリシズムの内面的深化に努めた。また、詩人、哲学者などの内面的理解を通じて人間の根本構造を解明すると共に、キリスト者の在り方を決定しようと努めた。
- (13) W. Schuchhardt: Begegnungen mit Adolf Reichwein. In: Huber/Krebs, 1981, S. 50.
- (14) Brief von E. Spranger an K. Hadlich vom 18. 2. 1925. (BAK)
- (15) Vgl. Rep. 92 Becker 1184. (GSAB).
- (16) Vgl. z. B. Rep. 92 Becker 1189, 1191, und 1202. (GSAB)
- (17) J. von den Driesch: Die von von den Driesch verfaßte Denkschrift. In: H. Kittel (Hrsg.): Die Pädagogischen Hochschulen. Dokumente ihrer Entwicklung(1) 1920-1932, Weinheim, 1965.
- (18) L. Englert(Hrsg.): Georg Kerschensteiner-Eduard Spranger, Briefwechsel 1912-1931, S. 219.
- (19) シュプランガーは、1925年11月11日付のハートリヒへの手紙の中で、その前日、彼が省参事官のフォン・デン・ドゥリーシュを訪問し、彼に好感をもったことを報告している。
- (20) Brief von E. Spranger an K. Hadlich vom 12. 10. 1925. (BAK)

5. 結語

- (1) G. Meyer-Willner: a. a. O., S. 296.
- (2) Brief von E. Spranger an K. Hadlich vom 6. 6. 1927. (BAK)
- (3) Brief von E. Spranger an K. Hadlich vom 14. 6. 1930. (BAK)
- (4) Brief von E. Spranger an K. Hadlich vom 29. 6. 1930. (BAK)
- (5) Brief von E. Spranger an K. Hadlich vom 25. 5. 1924. (BAK)
- (6) Brief von E. Spranger an K. Hadlich vom 1. 8. 1931. (BAK)
- (7) Brief von E. Spranger an U. Richter vom 30. 8. 1961. (BAK)
- (8) G. Meyer-Willner: a. a. O., S. 299.